

新潮

日本文学小辞典



新潮 日本文学小辞典

編集

伊藤 整 久松 潜 一
川端 康成 平野 謙
瀬沼 茂樹 山本 健吉
中村 光 吉田 精一



新潮社

新潮日本文学小辞典

定価3,500円

昭和43年1月20日発行 昭和54年3月10日8刷 ©

編集 伊藤 整・川端康成・瀬沼茂樹・中村光夫
久松潜一・平野 謙・山本健吉・吉田精一

発行者 佐藤亮一

発行所 新潮社 東京都新宿区矢来町71／振替東京4-808
電話 業務部 (03)266-5111 辞典編集部 (03)266-5410

印刷所 大日本印刷株式会社 東京都新宿区市ケ谷加賀町1丁目12番地

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛お送り
ください。送料小社負担でお取替えいたします。

製本(株)大口製本

序

最近における日本文学は、時代の流れ、世界の動きを反映して目まぐるしい変化を見せながら、出版ジャーナリズムの発展と相俟って、千五百年にわたるその歴史の中でも比類のない隆盛を示しています。また、国文学研究の分野では、古典文学研究の著しい進歩とともに近代文学研究も新しい学問として脚光を浴びつつあります。

小社では、さる昭和七年『日本文学大辞典』を刊行し、戦後、その増補改訂版、縮約版を刊行し、多くの方々のご愛用を得ましたが、縮約版の刊行以来すでに十余年を経過しました。ここに小社は、新しい時代の動きに注目して全く新しい文学辞典の出版を決意し、創立七十年記念出版の一つとして、また一昨年刊行された『世界文学小辞典』の姉妹編として『日本文学小辞典』の編集に着手しました。幸い、編集委員の諸先生をはじめ多数の方々のご賛同とご協力を得て周到綿密な準備と努力を重ねて来ました。

本辞典の第一の特色は、今日の見地から総覧して古典から現代に至る日本文学のすべてを一冊に集約した点にあります。記紀万葉の古代から江戸時代に至る古典の大家、名作を漏れなく収録し、明治以後、現代の作家とその作品には特に多くの紙数を費やしました。作家、作品の項目の他に各時代別文学史および諸流派、様式や、これらの事項項目によっても把握できない「古典と近代文学」「ジャーナリズム」「外国の日本文学研究」「翻訳文学」「好色本」などに類を見ない独自の項目を設け、有機的な検索に耐えうる内容を盛り込みました。特色の第二は、従来の難解な辞典的記述、資料的内容の羅列を避け、作家の鼓動と作品の息吹

きを生き生きと伝えることに最大の努力が払われた点にあります。この方針にそって考えうる最適の執筆者が選ばれ、学界ばかりではなく、第一線の作家、評論家の積極的な参加を得てその数は六百人にも達しました。原稿は専門委員によるデータその他の点検を経て、編集委員による閲読校訂が行なわれました。第三は、一冊の資料事典にも相当する内容を盛り込んだ各種索引にあります。生没年を付記した人名索引、発表、刊行などのデータを付記した作品索引、創・終刊などのデータを付記した新聞・雑誌索引などが収められ、詳細なデータを本文から索引に移すことよって、本文は一層読みやすくなり、一方、データのみを調べる場合には容易に検索できるように配慮しました。このほか、参考文献、文学年表、文学賞受賞者一覧、年号一覧などの付録にも多くのページがさかれています。

本辞典は以上のような特色と内容を持って完成を見るに至りましたが、企画当初よりの目標である「調べるだけの辞典ではなく、親しみを持って読むに耐える辞典」として自信をもって世に出すことができずのは、ひとえに編集委員、専門委員をはじめ関係各位の筆舌に尽くせぬご努力のためものであります。「文学辞典はその国の文化の尺度を示す」といわれますが、本辞典は千五百年にわたる輝かしい日本文学の脈動を伝えるものとして、文学愛好者の適切な案内となり、研究家の正確な指針となるものと信じます。しかし、なお一層の完璧を期すために、不備な点については同情あるご教示、ご批判をいただき、今後に資したいと考えております。

昭和四十三年一月

＊本辞典の
編集者および執筆者

編集委員

伊藤 整
川端 康成
瀨沼 茂樹
中村 光夫
久松 潜一
平野 謙
山本 健吉
吉田 精一

専門委員

◇近代関係
浅井 清
伊藤 信吉
尾崎 秀樹
小田 切進
木俣 修
楠本 憲吉
紅野 敏郎
三好 行雄
本林 勝夫
◇古典関係
尾形 仂
神保 五弥
野村 貴次
福田 秀一

執筆者

青木生子
青地 晟
青柳 瑞穂
青山 光二
秋庭 太郎
秋元 不死男
秋山 清
秋山 虔
秋山 駿
浅井 清
浅倉 治彦
朝野 建二
浅野 建二
浅見 磯淵
麻生 磯次
足立 卷一
渥美 かをる
阿部 秋生
阿部 喜三男
阿部 宙之介
阿部 俊子
網野 義紘
鮎川 信夫
新井 声風
荒木 良雄

荒竹 正人
有吉 保二
有藤 一郎
安藤 鶴夫
安田 正一
飯田 竜太
飯永 三郎
家永 三郎
伊狩 一男
伊口 一男
井上 浩山
池上 不二子
池島 重信
池田 弥三郎
伊沢 元美
石川 元謙
石川 徹
石田 波郷
石田 吉貞
石橋 万喜夫
石丸 久
伊豆 野タツ
和泉 あき
泉井 久之助
磯貝 英夫
磯田 光一

板垣 信
市川 為雄
市古 貞次
伊地 知鉄男
伊東 一夫
伊藤 信吉
伊藤 博
伊藤 正義
糸屋 寿雄
稻垣 達郎
犬養 孝
井上 宗雄
井上 豊
井上 百合子
猪野 謙二
今井 源衛
今井 卓爾
今井 泰子
井本 農一
岩城 之徳
岩佐 正
岩田 九郎
岩淵 悦太郎
巖谷 大元
植谷 元

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|------|-------|-------|-------|-------|------|------|------|-------|-------|------|------|------|------|------|-------|--------|------|-------|-------|-------|-------|-------|------|------|-------|
| 植手通有 | 白井吉見 | 白田甚五郎 | 梅谷文夫 | 瓜生敏一 | 江頭彦造 | 江藤保定 | 江藤淳 | 覆本隆司 | 遠藤祐 | 扇畑忠雄 | 大磯義雄 | 大井広介 | 大内初夫 | 大岡昇平 | 大岡信 | 大久保忠国 | 大久保正 | 大久保典夫 | 大久保利謙 | 大島建彦 | 大島康正 | 大曾根章介 | 太田三郎 | 大谷篤藏 | 大津山国夫 |
| 大野俊一 | 大野誠夫 | 大野林火 | 大村喜吉 | 岡倉古志郎 | 岡田純也 | 尾形純也 | 岡田喜秋 | 岡田利兵衛 | 岡野他家夫 | 岡保生 | 興津要 | 興田弘 | 奥野健男 | 尾崎宏次 | 尾崎秀樹 | 小山内時雄 | 小高敏郎 | 小高根二郎 | 小田切秀進 | 小田切秀雄 | 越智治雄 | 乙骨明夫 | 小原元 | | |
| 表田逸章 | 恩地輝武 | 遠地輝武 | 香川進 | 笠井秋生 | 嘉治隆一 | 梶原正昭 | 片桐顯智 | 勝野隆信 | 勝本清一郎 | 勝山功 | 加藤楸邨 | 金子清光 | 金子治郎 | 金子武雄 | 金子又兵衛 | 釜田喜三郎 | 鎌田五郎 | 蒲池歛一 | 上笹一郎 | 河合靖峯 | 河上徹太郎 | 川口久朗 | 川崎展宏 | 川島順平 | |
| 川副国基 | 川添昭二 | 河竹繁俊 | 河竹登志夫 | 川田浩 | 川端康成 | 河村政敏 | 河盛好藏 | 神崎清 | 菅野忠道 | 菅野昭正 | 菊地弘 | 菊地風 | 岸上慎二 | 岸得藏 | 喜多義男 | 北住敏夫 | 吉川英史 | 木戸清平 | 木下順二 | 木下彪 | 木原孝一 | 木藤才藏 | 木村捨 | 木村録 | |
| 久曾神昇 | 清岡卓行 | 清崎敏郎 | 金田一春彦 | 草野心平 | 草部和子 | 草部典一 | 楠本憲吉 | 国岡彬一 | 久野収 | 久保田淳 | 久保田一 | 窪田章一 | 窪田敏夫 | 窪田般弥 | 窪田正文 | 久保田芳太郎 | 熊坂敦子 | 倉和男 | 倉野憲司 | 栗坪良樹 | 栗原幸夫 | 栗山理一 | 栗田三郎 | 桑原博史 | |
| 郡司正勝 | 小池藤五郎 | 小池正胤 | 小泉太郎 | 小出博 | 香西照雄 | 紅野敏郎 | 小島信夫 | 小島憲之 | 五島茂 | 後藤重郎 | 小西甚一 | 小林智昭 | 駒田信二 | 小松伸六 | 五味智英 | 小山弘志 | 今山榮藏 | 近藤智雅子 | 近藤芳美 | 齋藤明 | 齋藤清衛 | 佐伯彰一 | 堺誠一郎 | 阪本越郎 | 坂本太郎 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|------|------|------|------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|------|-------|------|------|------|-------|-------|-------|--------|-------|-------|-------|------|------|
| 島津忠夫 | 島田厚 | 島田昭男 | 島崎千秋 | 島居清稔 | 柴生田稔 | 渋川武驍 | 柴田武士 | 篠田延義 | 志田延義 | 重松泰雄 | 重友毅 | 塩田良平 | 沢木欣一 | 佐藤忠勝 | 佐藤昭夫 | 笹淵友一 | 佐々木基一 | 佐々木雅発 | 佐々木八郎 | 佐々木徹 | 佐古純一郎 | 桜井德太郎 | 坂本政親 | | |
| 祖父江昭二 | 添田知道 | 相馬文子 | 瀬沼茂樹 | 関山良一 | 関根慶夫 | 鈴木三雄 | 鈴木知太郎 | 鈴木重三 | 鈴木重三 | 杉村恭武 | 末広恭雄 | 新間進一 | 神保五弥 | 進藤純孝 | 信多純一 | 新庄嘉章 | 白井浩司 | 守随憲治 | 下村寅太郎 | 清水文雄 | 清水孝之 | 清水茂 | 清水茂 | | |
| 田村四澄 | 玉井幸助 | 玉井五介 | 玉山乾一 | 谷山永茂 | 谷中馨一 | 田中裕隆 | 田中保隆 | 田中西二郎 | 巽田聖歌 | 多田道太郎 | 竹盛天雄 | 武部利男 | 竹西寛子 | 武田清子 | 竹岡正夫 | 高屋定国 | 高橋義孝 | 高橋春雄 | 高橋和巳 | 高田瑞穂 | 高杉一郎 | 高木市之助 | 高木市之助 | | |
| 永井義憲 | 永井竜男 | 鳥越文蔵 | 鳥越信 | 富山三郎 | 外山卯三郎 | 友野代三郎 | 富倉徳次郎 | 登張正実 | 利倉幸一 | 土岐善磨 | 戸板康二 | 戸板康二 | 暉峻直彦 | 寺本直透 | 寺田俊輔 | 鶴見繁治 | 壺井繁治 | 角田一精 | 堤屋文明 | 土橋寛 | 辻橋三郎 | 月村敏行 | 次田香澄 | 塚本康彦 | 多屋頼俊 |
| 西尾実 | 西尾光一 | 南波浩 | 成瀬正勝 | 中山和子 | 中谷博 | 中村雄二 | 中村光稔 | 中村俊夫 | 中村忠行 | 中村純一 | 中村幸彦 | 中村幸彦 | 永平和一 | 長野重治 | 中野重治 | 中野重治 | 永積安明 | 中谷孝雄 | 中島誠 | 中島斌雄 | 中島健蔵 | 中島悦次 | 中島悦次 | 長沢美津 | 長沢美津 |
| 浜田義一郎 | 埴谷雄高 | 服部直人 | 畑部有三 | 畑部有三 | 長谷川銀作 | 長谷川銀作 | 橋本迪夫 | 橋本不美夫 | 橋本不美夫 | 橋本不美夫 | 橋本不美夫 | 萩谷朴 | 芳賀幸四郎 | 野村貴次 | 野村貴次 | 野村清六 | 野田寿雄 | 野田宇太郎 | 野口富士男 | 仁戸田六三郎 | 西田長寿 | 西田長寿 | 西島麦南 | 西垣勤 | 西垣勤 |

| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|-------|------|-------|-------|------|------|------|-------|------|------|-------|-------|-------|-------|------|-------|-------|
| 福田恒存 | 福田秀一 | 福田宏年 | 福田久賀夫 | 福田清人 | 福田タマ | 広田栄太郎 | 平山城児 | 平林盛得 | 平畑静塔 | 平野仁謙 | 平野仁啓 | 平岡敏夫 | 平井卓郎 | 冷水茂太 | 日沼倫太郎 | 土方定一 | 久松潜一 | 樋口芳麻呂 | 樋口チツ子 | 柘源一悦 | 伴生一郎 | 針生種夫 | 原田弘子 | 浜田啓介 |
| 益田宗美 | 益田勝利 | 前田利治 | 前田妙子 | 前田秋愛 | 本多秋五 | 堀切信高 | 堀江信男 | 保昌正夫 | 保坂重都 | 本位田重美 | 古谷綱正 | 古林尚日 | 古田足欽 | 古田紹彦 | 古川清彦 | 藤原正晴 | 富士春男 | 藤平衛彦 | 藤沢令夫 | 藤沢宏幸 | 藤木宏男 | 藤枝静男 | 福原麟太郎 | 福田陸太郎 |
| 宮田和一郎 | 宮崎柘二 | 宮城達生 | 宮城文郎 | 峯村義秋 | 峯岸高根 | 源谷栄一 | 三谷野稔 | 水上甲子三 | 丸山季仁 | 丸岡明夫 | 松本寧至 | 松村緑 | 松村博司 | 松原新一 | 松野陽一 | 松田武夫 | 松田修 | 松島栄一 | 松崎仁 | 松尾聡 | 松浦貞俊 | 松浦利彦 | 町井佳声 | |
| 安川定男 | 八木福次郎 | 両角倉一 | 森山重雄 | 森本元吉 | 森本治修 | 森武之助 | 森川昭修 | 本山幸彦 | 本林勝夫 | 目崎徳衛 | 室木弥太郎 | 村山古郷 | 村山剛 | 村松孝 | 村野四郎 | 村田正志 | 村田静子 | 村島健一 | 宗政五十緒 | 武藤禎夫 | 武蔵野次郎 | 武川忠一 | 三好行雄 | |
| 吉野秀雄 | 吉田烈生 | 吉田久一 | 吉田精一 | 横山白虹 | 横道万里雄 | 祐田善雄 | 山領健二 | 山本正秀 | 山本友一 | 山本健吉 | 山室嘉将 | 山中裕光 | 山田博光 | 山田貞光 | 山田昭夫 | 山下一海 | 山岸徳平 | 矢野峰人 | 築瀬一雄 | 安良岡康作 | 安田保雄 | 安田章生 | 安田利昭 | |
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | 和渡田芳恵 | 和田守邦 | 若杉慧 | 頼田惟勤 | 米田利昭 |

凡例

〔本辞典の構成〕

- ①本文（人名、主要な作者不詳作品、時代別文学史、主要な流派、様式、文芸用語、新聞、雑誌）
 - ②参考文献一覧
 - ③日本文学年表
 - ④文学賞受賞者一覧
 - ⑤国名対照表
 - ⑥年号対照表
 - ⑦年号一覧
 - ⑧索引（人名、書名作品名、新聞・雑誌、事項）
- 〔見出し〕
- ①人名については、明治以前の古典関係も含め、原則として姓名を太字（ゴシック）で表わした。ただし、かたかなの外国人名は姓のみにした。
 - ②古典関係の人名のうち僧侶、戯作者、狂言作者、俳優および姓未詳のものについては、法号、筆名、雅号、芸名などで表わした。
 - ③明治以後の人名のうち筆名で通用しているものについては筆名で表わし、本文中に本名をしるした。
 - ④見出し語以外の本名、俗称、通称、字（あざな）、筆名、雅号、芸名などはすべて巻末の「人名索引」に収録して検索の便をはかった。
 - ⑤見出し語の下に現代かなづかいによる読みを付した。人名に

ついては、行がえにより姓と名の区別、名称の構成区分を明示した。

⑥見出し語が、主要な作者不詳作品は『』で、新聞・雑誌は「」でそれぞれ囲んだ。

〔配列〕

- ①見出し語（太字）の配列は、現代かなづかいによる五十音順によった。
- ②長音符号、中黒（・）記号、濁音、半濁音は、配列上無視した。
- ③雑誌項目のうち同音のものは、創刊年月の早いものから配列し、同性質のものは本文中の混乱を避けるため記号（①②）を付した。

〔解説文〕

（文字づかい）

- ①解説は原則として当用漢字、現代かなづかいで行なったが、必要と認められた場合は当用漢字以外の漢字も用いた。作品の引用のかなづかいは原文に従った。
- ②漢字の字体は、当用漢字字体、補正漢字字体、人名漢字字体を用い、それ以外については正俗を特に問わず、一般に多く通用していると思われる字体を使用した。
- ③「当用漢字表」以外の文字、「当用漢字音訓表」以外の音訓を用いる文字および誤読、難読のおそれのあると思われる文字については、できるだけルビを付した。引用に用いられた古文についても現代かなづかいで示した。ただし詩作品、特殊な用語など一部適用に無理のあるものはこれを避け、当用漢字以外の文字、「音訓表」以外の音訓でも広く通用しているものは省略した。

④ 内閣告示「送りがなのつけ方」については一部の術語、特殊な語について適用に無理のあるものはこれを避けた。

⑤ 外来語、外国の人名・地名の表記は『新潮世界文学小辞典』の扱いに準じた。

(生没年表記)

① 人名項目の見出し語の下に原則として日本年号による生没年月日をしるし、さらに西暦を併記した。

② 生没年月日が断定しがたい場合は、疑問符を用いるとか生没年のみをしるしたが、特に問題のあるものは本文中で説明するようにした。

(時代区分および年代表記)

① 古典関係の人名項目では記述の初めに大和、奈良、平安、鎌倉、南北朝、室町、安土桃山、江戸の各時代別の所屬を明記して、理解の助けとなるように努めた。

② 解説文中の年代記述には、原則として西暦を併用せず、日本年号のみとしたが、巻末に「年号対照表」「年号一覧」を付し、日本年号と西暦を対照してある。

(作品およびその年代表記)

① 主要作家の代表的な作品を「 」で囲んでその項目の後に立て、解説を行なった。

② 作品の角書きは、原則として採用したが、「書名作品名索引」においては省略してある。

③ 作品の年代は、原則として初出(雑誌・新聞発表、書きおろし刊行、初演および古典関係の成立)の年代を探り、おおむね作品名の次に()で示した。

④ 雑誌・新聞発表年および古典関係の成立年は、単に年代だけで表わし、刊行・初演年は年代に「刊」「初演」を付した。

⑤ 本文を読みやすくするため、作品の初出、刊行などの詳細なデータは、すべて巻末の「書名作品名索引」に収録した。

(地名表記)

① 明治四年の廃藩置県以前の国名は、すべてそのまま使用し、巻末に「国名対照表」を付して現行の都道府県名との対照を示した。

② 廃藩置県以後については、その当時使用された地名を町村名までしるしたが、小項目においては、都道府県名あるいは県庁所在の市名のみとしたものもある。

(テキスト)

① 古典関係の作品のうち、主要な作者不詳作品および主要作家の代表的な作品のテキストを選び、作品解説の後に付した。

② (A) は本文とすも、権威のあるもので専門家向き、(B) は注を含み、一般愛好家・大学生向き、(C) は現代語訳のあるもので高校生向き、の三種類に分けてある。

(記号)

① 作品はすべて『 』を用いて表わし、「 」は引用、雑誌・新聞名などに用いた。

② 解説文中に出てくる人名、作品名、新聞、雑誌、主要な流派、様式、文芸用語などのうち、本辞典に独立項目として収録されているものについては*印を付した。

③ 解説文中に引用された詩に使用した/ (斜線)は実作における「改行」を示し、// (二重斜線)は「一行あき」を示す。

会田綱雄 あいつな つなひこ 大正三・三一七—(一九

一四) 詩人。東京生まれ。日大社会学科に学び、戦中に南京で草野心平を知る。詩集『鹹湖』(昭三刊)で高村光太郎賞を受けた。現代的認識に民俗的な発想を織りこみ、巧まらずに現実と幻想を融合させ、また社会を自然に溶解させることによつて、そこに神秘的な生命の残酷な条件を探っている。他に『狂言』(昭三九刊)がある。「歷程」同人。(清岡卓行)

会津八一 あいつち やちいち 明治一四・八・一—昭和三一・一一・二二(一八八一—一九五六)美術史家、歌人、書家。別号秋岫道人、渾齋。新潟市古町通に生まれた。新潟中学中より八朔郎の俳号で「ホトトギス」に投句し、『万葉集』を愛読して短歌をも作つた。また明治三三年根岸庵を訪い、正岡子規に僧良寛の存在を紹介するところがあった。三九年早大英文科を卒業、新潟県中頸城郡板倉村の有恒学舎に

英語教師として赴任した。四年はじめ大和地方に古美術をさぐり、いわゆる奈良歌詠を試みたが、翌々年早稻田中学に転任。その秋早大の文学会講演で当時未開拓であった小林一茶の存在を深刻な人生詩人として創唱した。このころから坪内逍遙の知遇を得、早大に出講して英文学を講じた。四四年柳田国男らの郷土研究会に加わり、後またギリシア文化の究明に心を傾けたが、大正一一年に至り奈良美術研究会を創立、一三年には処女歌集『南京新唱』を刊行した。

昭和元年以降早大に日本・東洋美術史を講じ、四年浜田青陵、天沼俊一らとともに奈良飛鳥園から雑誌『東洋美術』を刊行、六年文学部教授となり、九年には『法隆寺・法起寺・法輪寺建立年代の研究』(昭八刊)により文学博士の学位を受けた。早大恩賜館内に東洋美術史料陳列室を設けたのもこの年である。このころから作歌活動も積極的になり、一五年には歌集『鹿鳴集』(前著『南京新唱』をもふくむ)を刊行、歌名とみに高まるに至つた。ついで一七年歌話を主とする『渾齋隨筆』を、一九年には歌集『山光集』を刊行。平生みずから歌壇外におき、歌人との交わりを求めなかつたが、二〇

年三月はじめて斎藤茂吉と面会、その數日後戦火のため東京・下落合の家を失ひ、郷里新潟市に帰住した。終戦前後心身ともに労苦の生活を送つたが、二一年「月刊ニイガタ」の社長となり、翌年には歌集『寒燈集』を、二六年には『会津八一全歌集』を出した。後者は読売文学賞を受賞。その後自作短歌に詳注を施した『自註鹿鳴集』(昭二八刊)を出し、早大名譽教授、新潟市名譽市民、新潟日報社社長として世を終えた。書の道にもすぐれ、個展の開催十數回に及び没後もなおつづいてゐる。書跡集に『渾齋近墨』(昭一六刊)、『遊神帖』(昭三三刊)、『会津八一の書』(昭三三刊)、『秋岫道人の書』(昭四〇刊)などがあり、また大和、新潟に歌碑も多い。八一は学者として美術史学、金石学に新風を建てたが、短歌についても万葉調、良寛調を借りてしかもけつして擬古に陥らず、新鮮ないちじるしい個性を発揮した。「かすが野に押し立てるつきのほがらかにあきのゆふべとなりけるかち」(『ぼんゑみてうつむごよろにありえ』す百濟ぼとけにしくものぞなき)。

『会津八一全集』全九巻。昭和三三・一〇、中央公論社刊。
(吉野秀雄)

アヴァン・ギャルド 前衛または前衛

芸術という。第一次大戦の前後から、ヨーロッパの各地に急進的な芸術運動がおこった。イタリアに未来派、フランスにキュビズム、ダダイズム、それにつづくシュールレアリスム、ドイツに表現派など、既存の芸術秩序を破壊し、これに急激な変革を加える芸術運動がつづいた。

一九世紀末から起こった西洋文明の不安定が大戦の破壊にひきつづく戦後の不安定と相俟って、近代文明の動揺と崩壊とを招いたのである。世界観・芸術観・芸術的方法のすべてにわたる動揺と崩壊であり、虚無的な現実拒否と絶望的な人格解体とを深め、これに乗ずる大胆な「芸術の革命」を彼らの生体験からこころみる芸術運動であった。これらの諸派を総括して前衛芸術と呼び、一九世紀の合理主義に対し、非合理主義的な抽象芸術へと創造的な発展をみせた。文学的には深層心理に立つ象徴主義理論が発展の契機として働いている。

わが国の前衛芸術は、明治末年の森鷗外、木下左太郎らの紹介にはじまり、まづ詩壇における与謝野鉄幹や川路柳虹の未来派の詩の移入が早く、造型美術においては神原泰や東郷青児が第四回二科展(大六)に未来派の絵画を出品し、普門

曉らによる未来派美術協会が結成された(大九)。この美術の方面では、吉野作造編集の『新芸術』(大五刊)のような啓蒙書が出版されるほど普及し、中川紀元、古賀春江、神原泰、吉田謙吉らのアクション運動(大一一)、ドイツから構成主義をもたらした村山知義のマヴォ(大一二)、旧未来派、アクション、マヴォによる三科の結成(大一二)と、珍奇な破壊運動はつづく。映画・演劇においては、ドイツ表現派の映画「カリガリ博士」が輸入上映され、大正一〇年、沢田正二郎の新国劇がG・カイザーの『カレイの市民』を上演したのが早く、一三年には小山内薫の築地小劇場が第一回公演にR・ゲーリングの『海戦』を上演して評判を呼んだ。秋田雨雀の『手控強盗』の先駆座上演(大一一)は、わが国の表現主義的手法をもちいた戯曲の初めであった。

このように、美術と文学との交流によって、前衛芸術の移植がおこなわれた。文学においては神原泰の『神原泰第一回宣言書』(大九)につづく平戸廉吉の『日本未来派宣言運動』(大二〇)があり、ダダイスト辻潤や高橋新吉、あるいは画家村山槐多の『槐多の歌へる』(大九刊)に結晶しながら、大正九年ごろから盛んになってい

った。そして、前衛芸術の破壊性と反抗性とはニヒリズムに根拠をもち、政治的にはアナキズムと結びついた。この結果、萩原恭次郎から岡本潤、小野十三郎、壺井繁治らの多くの詩人が現われ、「種詩人」「新興文学」「赤と黒」から「ダムダム」などの諸誌の特色を形成している。こういうダダイズム的な破壊的傾向が沈黙に帰するにしがたくなって、シュールレアリスムに移ったように、前衛芸術は現実拒否から人格解体へ、フロイディズムによる潜在意識の自覚による「超現実」の世界の表現による総括がみられた。詩壇における春山行夫らの「詩と詩論」への移行であるが、これより先、横光利一、川端康成らによる新感覚派文学の展開もその一つである。川端康成が「新感覚的表現の理論的根拠」として「表現主義的認識論」「ダダ主義的発想法」を説き、フロイディズムを探っていることか

らみても明らかである。他方、「芸術の革命」はその発展において「革命の芸術」にむすびつき、マルクス主義芸術運動を色づけ、マールツァ、フリーチェらの理論翻訳から、初期プロレタリア文学の文体の上に影響を残し、ポスターその他の広告美術に新様式をつくりだした。前衛芸術

術は第二次大戦後に、戦後派文学において、新しい定着をみせる。(瀬沼茂樹)

【鑿庭篁村】(あざな) 安政二・八・一五—大正

一一・六・二〇(一八五九—一九二二)小説家、劇評家。本名与三郎。竜泉居士、太阿居士、竹の屋(舎)主人とも号す。江戸・下谷竜泉寺町に生まれた。祖先は近江・鑿庭村の医家。父は与之吉、その五男である。与之吉は文化年間江戸に出、呉服商のち質屋を営む。与三郎は生後まもなく安政大地震にあい、母に抱かれて逃げ出す際、母は梁の下じきとなって圧死し与三郎は庭に投げ出され、隣人竹村某に助けられた。篁村と号するゆえんである。慶応元年一〇歳のとき、新材木町の質商箱根屋に客分として預けられ主人の芝居、俳諧、遊芸など風流を見習い和漢の雑書を耽読した。明治二年実家に帰り父を亡う。七年読売新聞社にはいり文選校正に従い、やがて雑文を書く。一〇年すでに篁村と号し高島監泉に見いだされる。一九年「読売新聞」に『当世商人気質』を連載し文壇に出る。同年七月同紙に連載された『人の噂』は代表的傑作である。二〇年ごろからブレット・ハート(深山木)(明二〇)、ポー(黒猫)(明二〇)、ルーモルグの人殺し(明二〇)、ディ

ケンズ(影法師)(明二二)などの翻訳劇案があるのは小説の新技術探求の跡である。坪内逍遙、磯野徳三郎などに学んだらしい。篁村の小説の大多数は短編であるが、次第に中編にも及び、『藪の椿』(明二〇)、『蓮葉娘』(明二〇)、『魂胆』(明二二)などは大いに認められ、『苦菜』(明三三)は『新小説』、『掘出しもの』(明三三)は『新著百種』にそれぞれ発表された。二二年、春陽堂から篁村小説集『叢竹』二〇巻六八編が出版され、二三年暮れ完結、このころが小説家篁村の最盛時で、幸田露伴は篁村と須藤南翠を『明治二十年前後の二文星』とし、『国民之友』は『篁村宗』の名をもってその流行を呼んでいる。夏目漱石は正岡子規への私信中で『篁村翁のみは直ちに胸臆を直叙して天真爛漫』と評している。今や篁村、森田思軒らの根岸派は尾崎紅葉たちの硯友社と対峙するに至った。この二二年暮れ篁村は『東京朝日新聞』に移り爾後没年に至るまで、劇評家竹の屋主人として活躍する。小説家としても、時代小説『勝間』(明三三)、『雪達摩』(明二四)を発表した。二五年から逍遙の懇請によって東京専門学校(早大)ならびに『早稲田文学』誌上で近松門左

衛門を講じ、その成果の一部分が『巢林子撰註』(明三五刊)である。篁村は江戸文学の研究者としても知られ『雀籠』(明四二刊)はその評論隨筆集である。小説家としても江戸文学の系譜にあり、自ら江島其碩を学んだとしその種の軽文学なしい俳諧、井原西鶴、近松門左衛門、上田秋成、曲亭馬琴の影響を受けている。その作の多くは市井人情風俗の軽妙洒脱な物語で人間運命の交転を描き一見勧善懲悪の趣向を帯びているが、作者はむしろ善が最後に勝たない世界はあり得ないという信念をもっていたかと思われる。劇評のごときも常にくめでたしめでたしの語句をもって終わったが、芸に関してはや峻峻で脚本本文の主意を重んじ登場人物の折り目正しい演技を奨励した。篁村はまた『旅観』(明三四刊)など紀行文をよくし、右田寅彦とのリレー紀行『小金井の桜』(明三三)、『伊勢参宮』(明四〇)は任巻。『篁村叢書』(大正元刊)、『竹の屋劇評集』(昭二刊)、『鑿庭篁村集』(昭三刊)がある。【当世商人気質】(あざな) 長編小説。明治一九・三・三三—一九・五・二〇「読売新聞」。二二・九、金港堂刊。勤勉と正直が身を興す商人道の話。スマイルズ『西国立志篇』の思想である。

【人の噂】^{ひとのうわさ} 長編小説。明治一九・七・六一九・七・七・三二「読売新聞」。二・三・一〇、春陽堂刊『叢竹』第四巻に収録。東京の老舗佐野屋の息子徳太郎が放蕩を始め吉原の芸妓と駆け落ち、佐野屋の後妻のつれ子おきんは手代の竹松と家出との噂。事實は家督の後継を譲りあつて身を隠したのである。徳太郎は手代善吉の妹お花と向島堤であい互いの不幸を嘆いているとすりかき突き当たつて財布を奪う。それを追いかけてくれた水元清は佐野屋の世話で立身した官吏である。噂では徳太郎入水溺死となるが、やがて夫婦はたにおきんは水元と徳太郎はお花と夫婦になる。噂の方を先に書いて、真実がそれを追っかけるという二重構造が巧みに組み合わされている。(福原麟太郎)

青木月斗^{あきつきづ} 明治二・一一・二〇—昭和二四・三・一七(一八七九—一九四九)俳人。本名新護。小学校時代は図書、一七歳のとき月宛、明治四〇年夏から月斗と号した。大阪生まれ。大阪薬学校中退。道修町で薬種商を営み、快通丸、天眼本舗として知られた。新聞「日本」の俳欄などに投じ、水落露石、松瀬青々とともに大阪俳壇の雄となり、三〇年一月、京阪満月会から松村鬼史らと大阪満月会を

分離、その育成に努めた。同じ年、正岡子規の与謝蕪村忌に加わり、三二年九月には「車百合」を創刊して、日本派を鼓吹。子規は、「俳諧の西の奉行や月の秋」の祝吟を贈つた。日本俳壇には三二年から姿を見せた。子規没後は、河東碧梧桐夫人が妹であつたところから高浜虚子と距離をもち、作風も特異な展開をみせた。この後、大正五年に「カラタチ」、九年に「同人」を創刊、日本派的な大きな写真と、大阪ふうな粋に根ざした、「町川や舟に火を焚く雪の音」「春暁や欄前すぐる帆一片」といった句風を育てた。戦後は、「調べ」のある句、「味」のある句を提唱、現代の句は月並みに墮している」と難じた。肝臓を病んで、大和・大宇陀町で没した。句集には『月斗翁句抄』(昭二五刊)がある。門下に岡本圭岳、湯村月村、水尾宋斤などがいる。(松井利彦)

青木健作^{あきけんさく} 明治一六・一一・二七—昭和三九・一一・一六(一八八三—一九六四)小説家。本名井本健作。井本家に養子になる前の姓が青木。山口県生まれ。東大美学科卒。成田中に勤務、同僚の鈴木三重吉の影響で「帝国文学」「ホトトギス」誌上に短編を発表。明治四五年「読売新聞」に連載した『お絹』が出世作。

郷里を扱つたものが多く、土臭いが、誠実な作風。中学教師を主人公とした『若き教師の悩み』(大八刊)が代表作。随筆集『椎の実』(昭一八刊)、「ひとりあるき」(昭三四刊)、句集『落椎』(昭二八刊)、代表作のほとんどを収めた『青木健作短篇集』(昭三刊)がある。(紅野敏郎)

「青空」^{あおぞら} 文芸雑誌。大正一四・一一—昭和二・六、青空社発行。全二八冊。同人は初め梶井基次郎、外村繁、忽那吉之助、小林馨、稻森宗太郎、中谷孝雄の六名。ついで淀野隆三、三好達治、飯島正、北川冬彦などが参加した。編集には外村、淀野、梶井などが当たつた。特殊な文学運動ではなく、三高から東大へ進んだ者の自由な集まりであつた。したがって雑誌全体としての影響力は大きくなつた。梶井の『檸檬』『城のある町にて』などの小説、『乳母車』『髪のうちへ』などの詩が掲載された。(中谷孝雄)

青野季吉^{あおのせきち} 明治二三・一二・二四—昭和三六・六・三三(一八九〇—一九六一)評論家。新潟県佐渡郡沢根村に生まれた。父は半五郎、母はヒサで、代々の地主、酒造業、回船問屋の長男である。幼名儀一郎、忠吉、中学入学前ごろに季吉と改名した。早くから生家を離れて貧しい漁師

夫婦に預けられ、幼年時代にすでに両親と死別した。県立佐渡中に入學して以来、同郷の北一輝などの影響を受けて社会問題に関心をもちはじめ、幸徳秋水、堺利彦などの「平民新聞」を読む一方、文学に親しみ、国木田独歩の『独歩集』などを熱心に読んだ。中学卒業後、旅中の河東碧梧桐とともに郡内を旅行して、その紀行文を「佐渡新聞」に寄稿したという。明治四二年、県立高田師範第二部卒業、しばらく県下の袋津小に教鞭をとったが、翌年上京、早大文科予科一年に補欠入学、東京を足場とする一生の行路を定めた。大正四年、早大を卒業（同期の人々に、直木三十五、保高德藏、細田民樹、細田源吉、田中純、西条八十、鷺尾雨江らがいる）、『読売新聞』に入社して、『日本図書新報』に、イブセンの『野鴨』の批評を寄稿したが、評論の書きはじめであった。「読売」の記者生活は短かつたが、ジャーナリストの友人を得、評論、創作を発表する機会を得た。七年には、岩淵辰雄、市川正一などの同僚とともに、ストライキを決議したが、理由は、シベリア出兵論についての社内の対立であった。「読売新聞」退社後、鈴木茂三郎や平林初之輔を知る。

また、ローブシンの『蒼ざめたる馬』(大八刊)を翻訳、「大正日日新聞」「国際通信」などに籍をおいたが、一一年五月、「新潮」に『心靈の滅亡』を発表して以来、評論家として文筆活動にはいった。

彼の社会生活は、はじめ第一次日本共産党員として実践に傾き、階級闘争の立場から、文芸の方向を批判することで終始していた。その当時は、ふつうの新聞、雑誌にも左翼論文がさかんに迎えられた時代であったと同時に、社会運動に対する弾圧が、急激にきびしくなった時代でもあった。彼は、「種時く人」の同人となり、一時は党の機関紙の編集に当たり、大正一三年には、日本共産党再建のために徳田球一らとともに上海に渡った。しかし、それを境に、政治的人間に対して疑惑を感じ、実践から身をひいて、もっぱら言論による批判に全力を尽くすようになった。そして特に、「文芸戦線」に拠って、文芸評論に専念しはじめた。社会批評もさかんに書いているが、政治家としてではなく、文芸家としての批判であった。一四年七月の『調べた』(『文芸』を含む評論集『解放の文芸』が、最初の評論集として、一五年四月に出版された。以後、第一線の評論家として、お

びただしい量の寄稿をつづけた。

日華事変の勃発後、昭和一三年に人民戦線事件で検挙された時を一つの転機として、彼は、戦争終結まで、思うことを書き得ない苦悶の中に暮らしていた。そして、一四年夏から二〇年春まで、日記を書きつづけていた。戦後、彼は、再起して新しい活動にはいり、日本ペンクラブの再建に尽力し、早大の講師をつとめ、日本文芸家協会の会長となり、さかんに評論を発表する一方、一時、社会タ イムスの社長となり、中国、ソ連を訪れ、日米安保条約改定反対の運動に参加するなど、三六年の死に至るまで社会の表面に立って活動をつづけた。三一年日本芸術院会員。主要な著書は第二評論集『転換期の文学』(昭二刊)以下、『マルクス主義文学闘争』(昭四刊)、『文芸と社会』(昭一刊、随想集『経堂襟記』(昭一六刊)、自伝的回想集『一つの石』(昭一八刊)、『文学五十年』(昭三三刊)など。

【青野季吉選集】『評論集』昭和二五・八、河出書房刊。初期から昭和二五年、還暦にいたるまでの主要評論を集めたもの。河出版『現代日本小説大系』の編集メンバーによって推進された。文芸評論ひとすじに歩いてきた青野の文学へ

の愛、平和への愛の切実な発言が多い。

【青野季吉日記】日記。昭和三九・七、河出書房刊。死後にはじめて公刊された、一四年夏から二〇年の春までの戦時中の日記である。この本に彼のくわしい年譜もついている。(中島健蔵)

青柳有美 明治六・九・二七—昭和二〇・七・一〇(一八七三—一九四五)ジャーナリスト、随筆家。本名猛。秋田県に生まれ、同志社普通学校卒業後、明治女学校や秋田中で教鞭をとり、「扶桑新聞」「実業之世界」などに勤めた。「女学雜誌」に關係し、また大正期には「女の世界」を發行。「有美臭」(明三四刊)、「有美道」(明三九刊)、「有美式」(大三刊)、「接吻哲学」(大一〇刊)などが主著。(佐藤勝)

青柳 優 明治三七・二・一—昭和一九・七・三〇(一九〇四—四四)評論家。長野県生まれ。早大英文科卒。はじめアヴァン・ギャルド文学の影響をうけ、シュールレアリスムふうの詩や小説を書いたが、のち文芸評論に転じた。広い視野のもとに公正で進歩性に富んだ発言をしたが、中道にして斃れた。「現実批評論」(昭一四刊)、「文学の真実」(昭一六刊)、「批評の精神」(昭一八刊)の評論集があり、「早稻田文学」の同人。(竹盛天雄)

青山光二 大正二・二・二三—(一九三一)小説家。兵庫県生まれ。三高在学中、一級下の織田作之助を知り、東大文学部在学中、織田らと同人雑誌「海風」を創刊(昭一〇)。戦後、「旅への誘ひ」(昭二三)以下の連作で、私小説的発想をもとにした、一種のモダニズムの作風を示した。「夜の訪問者」(昭二四刊)、「青春の賭—小説織田作之助—」(昭三〇刊)、「斗いの情景」(昭三八刊)などがある。「修羅の人」(昭四〇刊)により四一年小説新潮賞受賞。(久保田芳太郎)

「赤い鳥」 児童雑誌。大正七・七一—昭和一一・八(昭和四・三休刊、昭和六一—復刊)、赤い鳥社發行。全一九七冊。終始、鈴木三重吉が主宰して、その児童文学の理想を實踐した機関誌。彼は大正五年ごろから外国童話の再話、翻案によって児童文学への関心を示し、一方当時の児童読み物が一般に低俗で童心への細かい配感を欠く点を憂えて、芸術性の豊かな創作童話、童謡の確立を祈念した。彼の呼びかけは、森鷗外、島崎藤村、芥川龍之介をはじめほとんど全文壇の賛同や寄稿を得ることになり、以後、小川未明、北原白秋、西条八十、秋田雨雀など童話、童謡に主力を注ぐ作家たちがこの雑誌

を作品発表の場とし、知識人や教育者の支持もあずかって、「赤い鳥」は大正中期以降の児童文学の隆盛をもたらす中核となった。明治期の児童文学を芸術として一歩深めた功績は大きく、その作風は当時の自由主義、デモクラシー、人間主義思潮を反映して、児童尊重や個性の重視や教養主義的傾向を示している。復刊後は坪田譲治、新美南吉、与田準一など新人作家の母胎となった。なおこの誌上で三重吉、白秋、山本鼎が、それぞれ綴方、自由詩、自由画の指導を担当して、児童自身が創作活動に参加する道を開いた点も注目される。(恩田逸夫)

赤木格堂 明治一二・七・二七—昭和二三・二・二一(一八七九—一九四八)俳人。本名亀一。岡山県生まれ。東京専門学校(早大)在学中、精神的空虚をみたすため禪と俳句に励み、正岡子規門で俳句、短歌の指導を受けた。作風は、「頭巾著て肌脱ぐ老や二日灸」のように静かな情感を事実を通して打ち出すもの。一八歳ごろからはじめ、子規の晩年にはその代選をするなど好遇されたが、没後は清節を守って俳壇を退き、パリに留学。「九州日報」「山陽新報」主筆、衆議院議員として生涯を終えた。(松井利彦)